

---

# ワンモアチャンス

ぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ワンモアチャンス

### 【NZコード】

N1011T

### 【作者名】

ぐみ

### 【あらすじ】

高校卒業をまじかに控える女子高生、相沢優美。彼女は平凡なまま何事もなく高校生活が終わる事に不満と後悔を感じていた。

そんな時彼女にかつてない試練、そして思いがけず新たなるチャンスが舞い降りる！

彼女は今度こそ本当の自分、そして大切な物を見つけられるのだろうか！？

## ワンモアチャンスー序章ー

「起きろ相沢っ！！」私は後ろから担任に頭を叩かれた。もう今週に入つてからはまともに授業を聞いてない。私の名前は相沢優美、卒業を二週間後に控える高校三年生だ。既に地元の大学には推薦で受かっている。何も今更授業なんて・・・そんな思いから最近は勉強には熱が入らない。いや熱が入らないのは勉強だけではないかもしないが・・・

「優美ー、最近寝過ぎじゃん！？」クラスメートが休み時間に近寄ってきた。

彼女は川上美穂、私とは高校の三年間ずっと同じクラスだった。特に仲が良い訳ではないが、彼女は誰にでも気さくに話しかけてくる。

「まあ大学受かってるし、テンション上がりないんだよね～」私は軽く答える。美穂は「凄いよね優美、青谷学園なんてさあーなかなか入れないよ。」とにこやかに褒めてきた。

大体同級生や先生、親戚の人達もそういう。しかし私にとつてはそれは褒め言葉にはならない、むしろ何故かイライラする。

放課後私と友達の須永綾は一緒に下校している。もうこんな風に歩くのもあと数日かあ。そんな事を想いながら私は歩を進める。隣で綾がしゃべり続けている。「ねえ優美はさー大学入つたら何のバイトするー？私は教習所に行くお金ためたいから・・・って聞いてよー！」その時私は反対から自転車で通り過ぎた女の子に目がいった。その女の子は私が落ちた地元の進学校の制服を着ている。

「ねえ、まだ未練あるの？」

綾が問い合わせる。

「まさかあー、あれから二年経つんだもんいまさら・・・」私は苦笑しながらそう答えた。ただ視線はやはりその制服に向いていた。

自分でも理解できない、私自信確かに高校受験には失敗したしその時のショックは今も忘れない。ただ私の通つた私立神田南学園で過ごした三年間は楽しかつた。友達もいたし成績は学年でもかなり上位だつたし学校行事も盛り上がつた。何もこれ以上望む事なんてない。それでもここ最近ずっと心が曇つていた、なんだか余りにもあつけないのだ。特に部活に熱中した訳ではないし（とゆうか入つてなかつた）映画や本のよう激しい恋をしてもいない、大きな事件や冒険なんて起きなかつた。子供の頃私はよく漫画本を読んだ、その主人公は大抵高校生くらいの子でとてもない体験をしたり世界を動かすような事をしたからか、いつか高校生になると自分にも凄いストーリーが起きる事を期待していた。それも昔の話。私は来月には大学生だしその先は就職、いづれは結婚し出産、そんな人生が送れれば十分幸せ。私は家に帰りベッドに寝そべつた。コンコンとドアを叩く音がする。

「おねーちゃん、入つていい？」声の主は私の妹の相沢優香、小学六年生だ。4月には中学に上がるというのに童顔で小柄、はたから見たら三、四年生にしか見えないだろう。「なーに！？なんか用？」せつからウトウトしていた私は不機嫌に返事をした。優香は小さな包みを私にくれた。それをビリビリと破くとそこには羊のストラップが入つていた。

「おねーちゃん今日誕生日でしょ？ヒツジ好きだし氣に入ると思つて……」

そう、今日は2月11日私の18歳の誕生日だつた。決して忘れていた訳ではないのだが、子供の頃のように手放しでは喜べないとゆうのが正直な気持ちだつた。なんだか自分がもう若くないような気になつてきたからだ。とは言つてもプレゼントを貰えれば当然悪い気はしない。

「ありがとう、これ可愛いよ。」私は少し照れながら妹にいつた。さつきはせつから誕生日プレゼントを持ってくれたのに態度が悪かつた事を申し訳なく思つた。

「うん気に入つてくれてよかつた！それとさ～ちょっと頼みがあるんだけど・・・いい？」優香が尋ねる。まあ大した事じゃないだろう、いつも通り宿題を手伝えとか言うのだろう。この子ときたら大の勉強嫌いだし、提出物の半分も持つていきやしない。

「なに？また算数のドリルでしょ？」もはや聞くまでもないと思つた。

「えつ！？今日は違うよー明後日の授業参観にきてほしくて・・・」「え・・・？もう卒業だつてゆうのに授業参観とかあるの！？」本気で驚いたが、どうやら小学校生活の終わりに親に手紙を書き渡すらしい。私の時もそんなような事があった、ただし家に持つて帰つて渡したと思う。それに母はいけないらしい。私達には父がない、もう物心ついた頃からだ。母は

夜までパートで働いている。いつも学校から帰つてくると私と妹はふたりつきりだ。

「お母さんに仕事休むように言いなよー優香だつて周りがみんなお母さんなのに私がいつたら変でしょ？」

娘より店で他人に花を売つてる方が大事な訳はない、お母さんに頼めばきっと来てくれる。そう思った。だが優香はどうしても私に来て欲しいようだ。私達はいつも一緒だつたから妹が母より私に懐くのは無理もない。

「わかつたわかつた。でもみんなの前で私の事ペラペラしゃべんないでよね！」

優香はしつこかつたので私は渋々返事をした。明後日は土曜日なのに朝から学校なんて正直面倒だが・・・。

ようやく妹は部屋をでていつた。私はベッドでゴロゴロしようとしたが調度母が帰つてきたのだ。いつもより帰りが早い、手には私の誕生日ケーキを持つていて。もう祝う歳でもない、だが来年の私は大学で一人暮らし、こんか風に家族で過ごすのは今回が最後かも知れない・・・。私は今夜は心に募る不安や憤りを隠し明るくしようと決めた。

「お帰り母さん！お疲れ様！」——口髭と母に微笑んだ。

次の日、私は学校にいつもより早くついてしまった。他にする事もないでの普段はあまり使わない携帯をいじっていた。すると後ろから肩を軽く叩かれた。

「おはよう優美ちゃん！珍しくはやいじやん！」確かに私はいつも出来るだけ寝ていたいタイプだからそういうわれるのも仕方ない。

「おはようなつん。早く来すぎけやつてヒマだつたんだよ」よかつたよ。」「

私はさつきまで持っていた携帯をバックにしました。

彼女は私の隣に座り話し掛けてくる。

「ねえ優美ちゃん、明日あたし達カラオケ行くんだけど一緒にこない？高校最後に歌いまくろつ！ねつ！」カラオケは嫌いじゃない、だが明日と聞いてまず無理だと思った。妹の優香と約束しているのだから。

「ゴメン行きたいけど予定入ってるから……」私は妹の小学校に行かなければいけない事を説明した。

「えーっ優美ちゃんないと盛り上がりないよ！明日香や雪ちゃんも来るし、それにみんな卒業したらバラバラになっちゃうんだよ。こんな風にみんなで遊ぶ事なんて滅多になくなっちゃうよ……」

それは確かにと思った。彼女たちはそれぞれ専門学校や短大、就職とそれぞれの道を行く。きっとそれぞれの新しい場所でそれぞれの仲間ができるにちがいない。私の心は傾いてきた。

「だいたいさあ優美ちゃんはお母さんじゃないんだよ！なんでいつも妹に会わせてるの？」

その言葉を聞いて今まで妹の優香に振り回されてきた事が頭の中を巡った。家にはいつも幼い妹、私は姉として、一人で働き頑張る母になるべく苦労をさせたくないと常に自分を抑えてきた事を思い出した。クラスメートが持っている可愛いらしい筆箱でさえ遠慮して

欲しいと言えなかつたこともあつた。もう少し自分の気持ちを優先させても罰は当たらないに決まつてゐる。

「 そうだね・・・私も明日一緒にいく。優香には今日話すね 罪悪感はもちろんあつたがそれ以上に母、そして妹に対する反発があつたのだろう。

「 なんでっ！！お姉ちゃん約束したじゃん！！」

帰宅後、予想通り優香はものすごい勢いで噛み付いてきた。

「 悪かつたよ、でも私だつて残り少ない友達と過ごす時間を大切にしたいの・・・」なんとか理解して貰いたかつた。だが優香は続けた。

「 そんな勝手だよっ！それにお姉ちゃんとその人達、そんな大切な親友と呼べるほどでもないじゃん！！」

ピキ・・・私の心にひびがはいつた。図星だつた。この三年間で私は本当の親友なんていない、ただ授業の移動をしたり一緒にお昼を食べたり放課後一緒に下校したりする友達はいたが、本当に心が繋がつてゐる友達なんていだらうか・・・？いや私自身、それ程強い絆で結ばれていないから、こそ卒業後はバラバラになりもう会うこともなくなるような気がしたのだ。妹には痛い所をつかれた。

「 私が勝手？そんな事あんたに言われたくない！すぐ人を頼つて自分じゃなんにもしないくせに！意見だけは通るとでも思つてゐの！？」

感情が爆発した。妹も戸惑いを見せてゐる。だが一度溢れだした言葉は止まらない私の口から次々と溢れ出でくる

「 私はいつもいつも損な役ばかりつ！それもあんたが何の取り柄もない甘えて樂をすることしか考えてないようなダメな妹だから！！」

優香の目に涙が写る。普段私はダメな取り柄のない妹など思つてもいい。この子は人から好かれ、素直で何より優しい心を持つている。私が怒りとゆう感情に支配されている。

「 もうウンザリ！！妹なんて要らなかつた！！あんたさえいなれば高校受験だつて上手くいつてた！！！」

私は吐き捨てるよつよつと言つた。妹にとつてはとばっちり以外の何物でもないだろ？

「・・・「うつう、うえーんお姉ちゃんのばかー！…！」

彼女は顔を赤くして泣きながら部屋を飛び出していった・・・。こんな事を言つてしまふなんて私は本当にバカだ・・・ときつときつと数時間経てば思うのだろう。しかし今は感情が高ぶりコントロールできない。私は携帯を片手に自分の部屋に戻りベッドに潜りこんだ。今度こそ誰にも邪魔されず寝る！－次の日の朝、私は早く起きて出掛けた。優香と顔を合わせるのは気まずいからだ。

みんなが来るまで一時間もあつたので私は近くのデパートで一人でフラフラしていた。ふと電気屋さんの近くを通ると、大きな液晶テレビでサッカー中継が流されていた。画面の中ではプレーをする選手にそれを応援する多くの人達。こんな大勢の人から注目されるのってどんな気分なのだろう・・・。

私には想像もつかない、だつて周りから飛び抜けるような特技や才能なんて持ち合わせていないし、特に美人でもなくスタイルが良いわけでもないから。とゆうか持つている人が一握りで私はその他大勢の内の一人つてだけだろう。

ただ私には眩しかつた。こんなに真剣に打ち込める何かがあつて。さてと、そろそろ待ち合わせの時間になるかな・・・。

デパートを後にして駅へと向かつた。

「こつちこつちー！優美ーー！」

改札の近くで美穂や綾が私を呼ぶ、フラフラする時間が少し長すぎてしまつたようだ。

「ごつめーん！家を出るのは早かつたんだけど寄り道しちやつた。みんなに謝つた。

「大丈夫だよ。うちらだつてさつき来たばっかだし、電車の時間までまだ結構あるからー！」

確かに遅れたといつても数分だった。

「あれ？優美、可愛いネックレスしてるじゃん。」

綾が私の首もとを指差してゆう。この前妹から貰つた誕生日プレゼントだ。今日さつそく付けてきたのだ。

「これ優香からの誕プレなんだ！」

と私が答ると姉妹の仲が良いねと美穂達にもゆわれた。今喧嘩中だけどねと、返事をしそうになつて辞めた。喧嘩の元が今日みんなと遊び行くからだと説明したら盛り下がるに決まつて。ＫＹになつてしまつ。

私達は電車に乗り込んだ。

四人でプリクラを取り、雑貨屋さんを見て回つてから私達はイタリアン料理店に入った。

「遠藤君つて愛美に告つたんだよ～」

「マジで！？きつもー！自分の顔みろし～！」

盛り上がつてゐようだが私は話に入れない、とゆうより私にとつては誰が誰に告るとか、振られるとかあまり興味がわかない。

「ねつ優美、遠藤のやつ高望みしそうだよね？あんな顔でさ。」

急に話を振られた・・・

「そつだよー愛美が相手にするわけないのにね！」

と私は話を合わせた。そしてその瞬間自分に嫌気がさした。何故私はすぐ人に合わせてしまふのだろう？もつと自分の意思がはつきり言える人間に成りたいと何度も思つたか・・・「あんた達だつて人の事言えた顔？」な、んて言つたらすつきりするだらうなあ！だけど無理、クラスで嫌がらせをされている子がいると私はいつも止めよう、助けようと幾度と思つた。だがその度胸がない・・・

結局いつも傍観者になつてしまつたのだ。

ふつ・・・と視線をずらすと店内の時計に目がいった、今12時30分だつた。優香 達の授業は5時間目だから今いけば間に合うかも・・・

私はつぶやいた

「優香、どうしてるかな・・・？」

「また心配しなくて大丈夫だつて！むしろみんなの前で発表する

のが避けられて喜んでるつて！！ははは

軽い調子で綾が言う。私にはみんなが遠く感じられた。同じクラスで一緒に過ごし、こうして遊ぶ事もあるとゆうのに私に対して親身になつてくれるような子は一人もいないからだ。昨日優香が言ったように表面上の付き合い、ただ一人が嫌で付き合つているようなクラスメート達。なのに何故たつた一人の妹の約束を破つてまで私はここにいるんだろう・・・やはり来るべきじやなかつた！私は決めた。

「ごめん！私やつぱり帰る！..」

みんな急にどうした、とゆうような目で私を見たが自分の分のお金を置いて私は店を出た。きっと今頃私の悪口を言つてるだろ。いつもそうだ、いな子の悪口を言い始めるのだ。私も例外じゃないだろ。でもそんな事どうでもいい、言いたいならゆわせとけっ！頭の中で流れる心の声は珍しく強気だつた。

私は駅に向かい走つた。こんなに真剣に走るなんて小学校の徒競走以来かもしれない。

信号が点滅している、もう赤に変わのだ。大丈夫つ、まだ間に合う！

私は急いで横断歩道を渡つた・・・いや正確に言つと渡れなかつた。

「「ブツブツブー！！！」

大きなクラクションが耳元になつた。

私の目に白いワゴンの車が写る。

はつ・・・・！

もはや避ける時間などなかつた。次の瞬間には私は道路に横たわつていた。

「おいつ！大丈夫かつ！？」

「大変だーー！女の子がひかれたぞおつ！！！」

周囲の人々が私の周りに集まつてきたようだ。

視界がぼやける・・・これはただ事ではない・・・

痛い・・・怖い・・・嫌だ・・・いやだ・・・死にたくない・・・

生まれて初めて本当の死の恐怖が私を襲う。人間いつかは死ぬとゆうが、そんなの気休めにもならない・・・とてつもなく怖い・・・どんなに味気ない人生でも生きていたい。「神様っ・・・！もう私、贅沢ゆわないからっ・・・高望みなんてしないよ・・・」心から祈つた・・・だが、視界はだんだん薄れていく、私を暗闇の世界へと誘うのだ・・・

そんな・・・母さん・・・優香・・・

## 一出会い編一 ? 目覚め

僅かに光が差し込んでいるのがわかる。  
指をうごかしてみる・・・

ヒケツと私の中指が反応  
生きてる！私生きてる！

景色が鮮明としてきた。白い……これは、ああ天井だ。

和は病院に通はれたんだ  
そこで研修した  
神様は私を助けてくれたんだ・・・！

心から感謝した。

—未来—！」

その時、ヘットの傍のイスに腰掛けてしまふし男の子たふん1  
5、6歳の子だろうか・・・?

が私に近寄ってきた。その表情からは彼が心から私の事を心配していたのが云わかる。

名前も顔もまるで知らない。

ただ茫然と見つめることしかできない。

そして中年の男性と女性も私に近づいてくる。男の人はメガネをかけ、背の高い寡黙そうな男性、女性の方は丸顔で、穏やかそうな雰囲気の人だ。

「未来へつ本当によかつたあ……お母さん、おつ心臓止まるかと思つたよ……!!」

泣きじゅくの女性。

・・・ もゆるひて・・・?



の女の子。

今中学3年生らしい。

こんな事になるなんて・・・  
これからどうしたら・・・?

目が潤み涙が頬をつたう。

「コンツコンツ！」

病室のドアをノックする音が聞こえる。  
急いで涙をふいた。  
涙は見られたくない。

「未来ちゃん！」

体は大丈夫?」「

短髪で浅黒い肌の元気そうな女の子が病室に入ってきた。私?の通う中学の制服をきているのでおそらくクラスメートなのだろうが当然名前は知らない。

「あっ・・・うん。」曖昧な返事をしてしまった。

「本当にびっくりしたよ。救急車きた時はまだ心臓動いてなかつたんだから!」

「AEDとかなんとかゅうやつ、使つてんの私初めてみたよー！あられめっちゃ痛そう！」

よくペラペラと喋る子だなあ、私はほとんど答えるもないのに。

「それで退院はいつ?」「?

「明日・・・だと思つ。」

また氣のない返事だ。

「よかつたじやん！来週からは学校来れるねーー受験も近いし頑張んなきやね！」

えつ、私受験生なんだ。この前大学の受験が終わつたばかりなのに。

「あのー私どこの高校受けるんだつけ?」なんて間抜けな質問だろう。だが知らないのだから仕方ない。

「えーっ！…何いってるの！？一緒に芦岡女子高を受けるっていつも言つてるじゃん！…？」

びっくりだ！芦岡女子高といえは忘れもしない、私が二年前落ちてしまつた高校じゃないか！

という事は私？、音羽未来は、かなり勉強が出来る子なのだらつ。

「ねえ大丈夫？なんか様子おかしいよ

「ちょっと頭がぼんやりしてて…・・・

苦しい言い訳だ。

「まだ体調良くないみたいだから私もう行くね？月曜からは学校来れるでしょ？ どうせ卒業式の練習ばつかでつまんないけど。」

彼女はそう残して病室を後にした。結局名前は分からずじまいだつた。

私はまた病室に一人になつた。直に家族が来るだらつ。もちろん私の本当の家族ではなく、音羽未来ちゃんの家族だが。

彼女は家族に恵まれている。凄く大事にされ育つた事が伝わる。

今頃お母さんと妹の優香はどうしているだらつ？

家に行きたい。一人に会いたい。私がこうして未来ちゃんの体に入つてしまつたのだから、彼女が私になつているのだらうか？それではまるで昔あつたドラマのようだ。

どちらにしても確かめに行きたくて仕方ない！…いつそ今から…・・・いや私が急に病院から抜け出したらみんなが心配する。でも明日までは待てない！！

私は棚の上にあつた黒いジャンバーを羽織つた。

さあ出掛けよう、そう思つた矢先に未来ちゃんの家族が訪ねてきた。

「どうしたの？そんな着込んで…・・・

彼女の母に聞かれる。やむを得ない、やはり明日だ。

次の日、私は退院して家に戻った。音羽家はまだ新しい一軒家で、庭は芝生で広く、レオナルドという大きな白い犬を飼っている。

しかし部屋で寝転がつても他人の家としか思えず居心地がわるい。

「未来、お母さんお買い物行くけど一緒にくる?」

部屋に入ってきたお母さんに誘われる。

行く訳はない。私はさつきからずっと彼女が出ていくのを待つていたのだから。彼女は専業主婦のようだ。

私は断つたので一人で出掛けた。それを待っていた私も少ししてから家を離れた。

しばらく歩き駅から電車に乗る。

心臓が高鳴る。

ドクンドクン!

こんなに大きくなるなんて、体育館で全校生徒の前で作文の発表をした時より、この前のセンター試験の時よりはるかに上だ。足が震える。電車の中でも座つてなどいられない!

息も上がる。

電車から降りた、あと数分だ···

凄く不安になる。

あの角を曲がった所だ···!···!

「···そなな···まさか···」

私は目を疑った。家には礼服をきた人々が集まっている。

そして黒い車···もはや嫌でも想像がつく、ついてしまつ。ふら

ふらの足どりで私は家に近づき窓から中を覗く···

。母だつ! 隣に妹もいる···

母はまるで生氣を失つてゐる！まるで死の淵にいる病人。こんな母を見たことなどない！

そして妹・・・、

もはや涙はかれはてたろうに、なおも泣きつづけてゐる。

その時、近所のおばさんが数人で通り過ぎる。

「相沢さんちはさへホント氣の毒だよつ！！夫を若くして亡くしてから、女手ひとつで子供を育てたつてのに、娘さんにまで先立たれちやね！」

あたしだつたらもう生きていけないよ。」

その通りだ・・・

母にとつて私と優香は生き甲斐だ、何よりも大切にしてきた。その為に何年もお花屋さんと工場での仕事を掛け持ちしてまで頑張つてきた。

それなのに何故、何故こんな仕打ちを！

ダメだつ！あんな様子の一人を見てなどいられない！

私は逃げるようになら離れた。本音は今すぐ二人の元へ行き、私はここだと伝えたい！だがそんな事を誰が信じる！？

涙が溢れる。

人前では滅多に涙を見せない私が、大勢の人のいる駅で声をあげ泣き叫ぶ。

もはや人の目など氣にする余裕なんてない！

「お嬢ちゃん大丈夫かい？」

おばあちゃんが声をかけてくれたみたいだが、今の私の耳には入るわけもない。

「うわああああーうわああー！ー！」

まるで赤ちゃんのように泣き続けた。プラットフォームには私の泣き声が響きわたる。

今にも倒れそうだ・・・このまま倒れてしまいたい。

「ちょっと未来どうしたの？！？」

そんな声など無視をし、家につくなり私は部屋の鍵を閉め倒れこむ  
ようにベッドに横たわる・・・

「未来っ！未来！？」

彼女の母がドアの向こうから呼び続ける。

辞めてっ！その名前で呼ばないでっ！！

私は耳を抑える。

覚めてっ覚めて・・・もつこの悪夢からっ！！！

あの日、私が、私でなくなつた日から二日が過ぎた。今は音羽未来が通つていた中学、大谷西中学に行つてゐる。まだ夢の中にはいるみたいな日々だ。これまでの学校生活でわかつた事が三つある。まず未来ちゃんはクラス内ではおとなしくあまり目立たない女の子だつたという事、次に運動神経はさしてよくない・・・むしろかつての私の方が体が俊敏に動いた気がする事。

そして三つ目、3月9日に公立試験を控える受験生だという事。しかも私にとつて憧れの芦岡女子高だ。三年前私がどれ程あの高校に行きたかっただか。

だが今はこの状況に滅入つてゐる。今までの環境ががらつと変わり、家族を失い4月から始まるはずだつた新生活も失つた。とても受験の事など考えられない。朝がくるたびに元の私に戻つてないかと願い、その度に落ち込んでゐる。

今もこゝうして休み時間にひとりぼっちで窓際の席から外を眺めてゐる。

私を失い絶望する母の顔を思い出す、胸が苦しい、いつそあの時あのまま死んでしまつていれば何も知らずにいられたのに。こんな辛い思いをしてまで他人の体で生きている意味などあるだらうか・・・？娘と姉を失つたと思っている家族に、私を本当の娘だと信じている未来ちゃんの家族。

この窓から飛び降りたら死ねるだらうか？私の頭にふとそんな考えが過ぎつた。しかしそんな事ありえない、なぜなら私にそんな度胸はない。いくら人の体とはいえ、落ちたら痛いのは私だ。痛みなどなく眠るよつに死ねるならそつしたい。

「未来ちゃんっ！」

後ろから声をかけられた。その子はつい先日病院にお見舞いに來てくれた女の子。名前は確か東野 茜ひがしのあかね

ちやん。

「ちよっとせーiji数日未来ちゃん暗いよーへりあがひー。段験の事で頭がいっぱいなのは分かるけど、そんないつも下向いてると幸運が逃げちやうよ！？」

彼女は凄く明るい子だ。クラスでもムードメーカーだし、まるで悩みなどないように見える。

だいたい私はとっくに幸運なんて物から見放されている。

そうとしか思えない。この一週間で人生の全てを失っているのだから。

「ねつ 今日学校終わつたら竜泉神社に行かない？ 合格祈願しようよ。あたし達が一緒に芦岡女子高に受かるよつにー。」

竜泉神社とはここら辺では有名な神社だ。

「いやー 私はいいよ。御利益とかあんまり信じてないし」私はすぐさま断つた。

「でも尊じや結構運氣上がるらしーよー。」

茜ちゃんはそういうが実際私はそこに二年前に初詣で合格祈願をして落ちているわけだ・・・。

まあそれはともかく、私は今受験どころではない。

「たまには気分転換しなくちゃ！ その方が勉強も頭に入るよー。」

結局彼女と一緒に行く事になってしまった。私は本当に押しに弱い。なんとゆうか断りきれないのだ。

学校が終わり私と茜ちゃんは自転車で神社へと向かう。

私は特にしゃべらないので、茜ちゃんが私に話しかけてくる「あたし芦岡でも絶対バスケ部に入るんだつー目指せ全国つて感じ。つてちょっと突っ込んでよーそれはないつてセーーあたしが痛いじゃーん」

茜ちゃんはバスケ部だったようだ。体は小さいし意外だ。小学生の

時から始め、市の代表にも選ばれたらしいからきっと上手いのだろう。

神社についた。結構混んでいるみたいだ。

受験生がたくさん神頼みにきているわけだ。私は人混みは苦手なのだがここまで来てしまった以上は仕方ない。

それに屋台が出ている、私の大好きなフライドポテトだ。

「茜ちゃんポテト買わない？」

早速誘つた。

「いいね～っ！かおつ！」

彼女も乗り気だ。

「それと、ちゃん付けしなくていいからさつー！」

と続けた。

フライドポテトは奢つてあげた。茜ちゃんは遠慮していたが中学生の子に払わせるのは気が引けたのだ。

久しぶりに嫌な事を忘れられた。体は変わつても好物は同じ。

それに茜ちゃんは凄く感じの良い子だ。

この子と同じ学校に通うのは悪くないかもしれない。

ベンチに座りながら一人でいると茜ちゃんが口を開いた。

「あたし、未来ちゃんが倒れた時凄く怖かった。今まで身近で亡くなつた人いから、人の死とか遠く感じてたから・・・もちろん誰にだつて命には終わりがあるって知ってるけど、でも・・・普段そんな事意識してなくて・・・ってなんか上手く言えないなあ！まあつまり一日をもつと大切にしたいと思ったの。」

苦笑いしながらそう締めた。

彼女の気持ちはよく分かつた。

私も高校二年の秋に祖父を亡くすまで人の死など別世界の事のよう思つていた。テレビで殺人や事故があつても、それを身近に感じた事がないのだ。

祖父を亡くした時始めて人の命の儂さを噛み締めた。

本当なら私はこの世界に存在しない人間なのだ。こんな風に誰かと話し、悲しみ、食べ物の味を感じる事など永遠にないハズだったのだ。ポロポロと涙がこぼれる・・・

「えつ未来ちゃんどうしたのっー?」

なんか気に障つた?

辛いこと思いださせちゃつた!?

「ゴメンー!ごめんねっー!」

茜ちゃんは突然の事で慌てている。

そうじやなく、私はたとえ自分の体ではなくても、この世界に留まれた事に始めて感謝の気持ちを抱いたのだ。自分の魂が消え、もう何も感じたり、見たりできない、それを想像した。喜びも悲しみも悩みも痛みさえない・・・。

そしたら今私の目に映る景色が眩しく輝いて見えた。

「もう帰らうか未来ちゃん?」

心配そうに私の顔を覗き込む茜ちゃん。

私は黙つて首を振り、涙を拭いて言つた。 「急に泣いてごめんね。

合格祈願しようよ!」

私はこの時に心中で誓つた。神様の気まぐれで与えられたもう一つの人生、精一杯生きると、いつかあの世で未来ちゃんにあつた時に恥ずかしくないようだ。

## ？合格発表

あれから1ヶ月が過ぎ、今日は合格発表の日。私はついこの前大学を受験した高校生だし、先週のテストでも手応えは十二分にあった。合格はほぼ確信している。

だがそれでも一度は落ちているだけあって数日前から落ち着かない。一緒に受験した茜ちゃんとは別々で見に行く、片方が落ちていたら気まずいと思った。

「お母さん達は別にいいからねー未来が例え落ちてたって！」

朝出発する前に玄関でおばさんが声をかけてくれた。

「ありがと。受かつてたら9時までには電話するよ」

私はそう言いながらおばさんに持たされた携帯を見せた。 今の私はまだ中学生だから自分の携帯を持つていないので。

芦岡女子高の校門をくぐった時には更にドキドキは増してきた。

「きっと受かつてる。あれで落ちてたら合格できる人なんていない」頭ではそう言い聞かせているが鼓動は激しくなる。

掲示板の前に近づく、そこは歓喜と落胆する受験生でうずくまっている。

420・・・私の番号ははとつぐに頭に刻まれている。それでももう一度受験票に目を移し確認する。

よしつ

覚悟を決める

掲示板に張り付けられている合格発表の番号をさがす。

328 333 335 · · ·  
• • 411 413 416

• 418

喜びが爆発した。

と、その時横から肩を叩かれた、茜ちゃんだつ

私も受かつた！！

茜ちゃんも満面の笑顔だ。

「あかね、よかつたよ！ちょー緊張したわ、つてゆか先に来て私が受かつてゐる知つてたなら先に教えてくれてもいいのにー！あたし緊張しすぎて心臓止まるかと思つたよー！」

「前みたいな事にはならないでつ！大体さあ私が教えちゃつたらつまらないでしょ！？」

私達はしばらく喜びを分かち合つた。

少しあつておはせん達の事を思って出した。

家で待つおばさん、おじさんに電話をした。一人ともまるで自分の事のように喜んでくれた。

れどもチラリート?

「いいやせつかくだしビーチも買つね！」  
おばれんもすつかりテンションが上がつてゐる。

「高校生になつてもよろしくね未来ちゃん！」

卷之三

· · ·

そうだこんなにも嬉しい気持ちなのに、もつれを母や妹と分かれ合ひ事ができないのだ・・・

私は三年前の今日、合格する事ができず心の底から落胆した。もしあの時私が受かっていたら、おさん達のよつに母も喜んでくれただろうに・・・。

今日何か一人にしてあげたかった。

でも何も思いつかない・・・

このままおさん達の待つ家に帰るうか・・・と思つたがせめて顔だけでも見に行こうと決めた。

ここ一ヶ月、一度も見ていないのだから。

そうはいつても今の私は完全に他人なのだからそう簡単に話ができるとは思えない。

優香は小学校を卒業して今は春休みだろうが、家中に入る口実が見つからない。

だが昼間花屋のパートをしている母に会つことは簡単だ。私がお客様として行けばいいだけの事なのだから。

そう考え母の勤めるお花屋さん

“グルーヴ”に入った。

そこには確かに母がいた。

しかし最後に見た時よりずいぶんとやつれている。

その顔はこけていて、疲れも感じさせる。

こんなに近くにいるのに母に何も言葉をかけられない。

もどかしい・・・。先程までの私は喜びでいっぱいだったのに、変わり果てた母を見てそんな感情は消し飛んでしまった・・・。

私はピンクのコスモスの束を買った。

「ありがとうございます。1480円のお買い上げになります」

それが約一月ぶりに聞いた母の声だ。

「あのっ・・・・・」

つい声をかけようとしてしまった。

でもなんて言葉をかけたらいいのか、次の言葉がでこない。

「どうしたのお姉ちゃん?」

母が私を怪訝そうな顔で見ている。

「あっ・・・いえ何でもありませんっすみません!」

私は慌ててそういう、包んでもらったお花を受け取った。

そしてそそくさとお店を出た。

すっかり気が重くなつてしまつた。

元々母はスレンダーな体型だが、あんなに瘦せてて体は大丈夫なのか?  
優香はどうしたのだろうか?

不安が広がる・・・。

と、その時携帯がなつた!

この携帯はおばさんの物だから、おばさんの好きなサザンの歌が流れる。

「もしもし。」

私は電話にでた。

「ちょっと未来今何してるの?お昼みんなで食べにいくんだから早く帰ってきてよ!」

おばさんからだ。そういうえば、お昼にみんなでお寿司を食べに行くと言つてた。

「うひごめんっ!あと30分くらい待つてー先に行つてもいいよ、後で自転車で行くから」

おばさんは不満げだ。そりやそりだらう、今日の主役は私なのだから。おばさんはまだぶつぶつ言つてたが私は携帯を切つた。

どうしても寄りたい場所があるので。

そこは一ヶ月間、近づくに近づけなかつた場所・・・私の、相沢優

美としてのお墓。

これから始まる新たなる人生に向けてここでケジメをつけたかつた。いつまでも避けてはいられない、受け止めなくては。

私のお墓はお父さん、おじいちゃんと一緒にだから何度も足を運んだ場所にある。

かつての私の家から15分ほど、周りは竹やぶと小川が流れる静かな所。

ここに私の本当の体が眠っている。

相沢家・・・。

ここだ、父や祖父も眠るこの場所だ。

凄く複雑な気分だ。こうして自分のお墓を見下ろすなんて。

視線をそらすとそこには多くのお供え物と綺麗なお花が並んである。きっと母達はショッちゅうここに来ているのだ。

「あつ・・・・・これはつ・・・・」

つい口にしてしまった。

そこにあつたのは私が誕生日に優香から貰つた羊のペンダントだ。私が事故にあつた日も着けていた。だがペンダントはほとんど傷もなく多少汚れているだけだつた。

私はそれを手にとり暫く眺めていた。そしてポケットからハンカチを取り出し軽く拭き、首に着けた。お墓にある物を取るのは多少気兼ねしたが、これは自分で持つていたかつたのだ。

妹との絆、

そして自分が相沢優美である事のあかし。

私はこれから音羽未来としての人生を歩む、しかし相沢優美である事も忘れる訳にはいかない！

首に着けたペンドントを強く握り私は心から誓つた。

私は一人分の人生を生きるんだ、精一杯、後悔のないように！  
お父さん、まだ私はそっちに行かない。だから見守つて・・・

私を。お母さんと優香のことも・・・。

春の訪れを感じさせる太陽が眩かつた。

その日は6時前に目が覚めてしまった。 そう、 今日は芦岡女子高の入学式だ。

つい最近まで18だった私が15歳の女の子と一緒に高校に上がるなんて不思議な感じだ。 たしかに3つ年下だけ、 なんて言つてしまえばそれまでだが、 若い時の3つ差はでかいのだ。

そりやあ70 80ともなればあまり気にもしないだろうが私達は十代だから上手く打ち解けるか不安だ。

それで色々考えていたら熟睡できず、 こんな朝早くに髪のセットをしているのだ。 それに今の髪はくせつ毛でなかなか決まらないのもある。

今までにはサラサラした手触りだったのに、 未来としての髪の毛はどうにもクシャクシャしてしまい不便に思う。 このくせつ毛はおばさんからの遺伝なのだ。

春休み中にストパーでもかけた方がよかつたかも知れない！  
など少し後悔をした。

芦岡女子高まで電車で20分くらいかかる。 初日から遅刻して変に注目は浴びたくないと思い、 私は一時間前には家を出た。 紺色の新商品の制服。 白いスカーフに、 憧れの四つ葉のモチーフが後ろ肩の所についている。

制服を着ると、 私立神田南学園での思い出が消え、 本当に今日始めて高校生になる気がした。

不安と期待が入り混じったような初々しい気分なのだ。 それにおばさんから自分専用の新しい携帯も与えてもらえた。 まだ家族の数人のアドレスしか入ってないが、 これから友達ができればどんどん増えるだろう。 しかし、 まずクラスが気になる。 何しろ昔しか友達が

いない。

新しい環境に馴染むまでが大変なのだ。少なくとも数日は友達はできずクラス移動、休み時間、そしてお昼と一人で過ごさなくてはならなくなる。茜さえクラスが一緒にならずいぶんと気が楽になる。そう思っていたのだ、が残念ながら私は一組で彼女は三組になってしまった……

「未来ちゃん！クラス別々になっちゃったね！！がつかりだよ。」  
茜はそう言っているが明るく元気な彼女の性格を考えたら、どのクラスに入ろうと上手に打ち解けるだろう。

「まあクラス隣だし休み時間には遊びにいくよ！」と言ってくれているが一週間もすれば新しい友達といて私の所には来てくれないような気がして不安だった。

私たちはクラスのある三階に向かうため階段を上っている。 すると茜が突然声をあげた。

「あっ！！！あの子・・・・！」茜の目線の先にいたのは、黒髪のサラサラした髪の毛が肩まであり、肌は白く上品で整った顔立ちの少女だ。その少女は廊下で先生と話をしている最中だ。

「綺麗な子だけど・・・茜の友達？」

「ううん。友達って訳じゃないんだけど、部活で試合した事があって、彼女のチームは全国大会の常連だったし、個人としても県代表とかにも毎回選ばれているから、こじら辺でバスケやってた人達の間じゃかなり有名な人なんだ・・・」  
茜のテンションがいつも以上に高い。

「へえ～そりや凄いっ！あの顔でバスケも上手いなんて天は彼女に一物を与えたとしか思えない。

「よかつたじやん。そんな上手い子がいるなら強いチームになるか

もよ？」

茜に言つた。茜自身はかなりの実力者なのに中学ではチームメイトに恵まれたとは到底言えず、三年間で一回戦に上がつたことが一回だけとゆう。

それから私達は別れ、別々のクラスに入つていつた。  
私の席は前から3番目の廊下側だ。名前順で、音羽はおから始まる  
のだから前には数人しかいない。

周りには顔見知りなど一人もいない。凄く心細い。  
話す友達もいないので携帯をいじる。

とはいってもメールを打つ相手さえいないので・・・

「ガラツ」

クラスの前のドアが開いた。

先生かな、と思い一度顔を上げた。

入ってきたのは170はあるだろう長身に、カールのはいつた茶髪  
に色黒の女の子だ。きつそうな目つきで私の苦手なタイプど真ん中  
といったところだ。

「うわつ席近かつたらどうしよう！」

私の心は真つ先にその心配をしていた。  
しかし私の心配は杞憂に終わる。

彼女は窓際の方に歩いていつたからだ。

よかつたあ！心底そう思つた。私は昔から不良っぽく見える子に苦  
手意識がある。なるべくなら関わりたくないとゆうのが本音だ。

次にドアが開いた時は本当に担任の先生だつた。40半ばと思われ

る男性だ。

先生が入ってくるとみんなが席に着き、少ししてから先生の自己紹介が始まった。

先生の名前は橋本英一とゆ'ひ'ぢ'い。

なんとも真面目そうな人だ。国語の授業も受け持つらしいが、おそらく授業は退屈なものになる事は間違いないだろ。

ホームルームが終わると私たちは廊下に並び体育館へと向かう。入学式が始まるからだ。

芦岡女子の体育館は思つてたより狭く感じた。おそらく私が今まで私立の学校に通つていたからだろ。

私立神田南学園には全クラス冷暖房完備に加え、体育館には映画館並のスクリーンもあつた。それに比べると公立の芦岡女子は設備面では大分見劣りする。

私は式の間ほとんど上の空だつたし、周りのほとんどの女の子もぼうつとしている。

校長先生の話を真面目に聞くなんて子は昔も今も滅多にいやしない。この体育館にいる9割以上の子が早くこの退屈な話が終わる事を望んでいるだろ。

「続いては新入生代表、風間時音さん！」

司会の言葉にハツつとした私は教壇に視線を戻した。

先程茜が騒いでいた女の子だ。

新入生代表に選ばれていた。

さつき廊下で先生と話をしていたのは、この事を打ち合わせしていったのだろうか？

私の近くの席に座っている何人かのコソコソ話が聞こえる。

「相変わらず凄いね時音ちゃん。確かに代表挨拶つて入試の結果の最優秀者がやるんだよね？」

「マジで！？ やばっ！」

最優秀者ねえ・・・・。

頭脳は大学生の私としてはまったく立場ないなあーと心の中で苦笑した。

試験の出来に關しては私だつて相当の自信があつたというのに。

それにしても顔は良い、運動神經もよくて、その上頭もいいなんてまったく天は一物を与えないなんてジコの誰の言葉だか。現に彼女は何物と持たされているじゃないか。

気が付くとまた私の悪い癖が出てる、誰かと自分をすぐに比べて、自分は自分は・・・と、卑屈になつてしまつて、大体比べる相手が悪い。

私は頭の中に溢れてくるネガティブな思考を追いやる。

横を見るとちょうど三組の席に腰かけてる茜と目があつた。茜も風間さんが新入生代表に選ばれていた事に驚いてるようだ。

そつこじじて式は終わった。

私たちは再びクラスに戻る。

体育館通路に桜の花びらが落ちてきている。

の問題が提出され、その問題に対する解説が示された。

朝早く、まだ6時前だが私は洗面台の前にいる。なぜならばヘアーアイロンを使って髪を真っ直ぐにしようと努力しているからだ。高校生活の2日目、なんとか周りと打ち解けたい。そのためには髪型にも気をくばらなければと私は妙に張り切っていた。

たかが髪、されど髪、女子にとつては重要だ。

以前私のクラスに天然パーマが強い女の子がいた。彼女のあだ名はボンバーマンだった。私は間違つてもそんなあだ名を付けられたくない！

そのためには毎日2、30分の早起きは欠かせない。

学校に着いて私は自分のクラスに入り、席に座った。周りの子達は同じ中学とかでグループを作っていたが、私はなかなか自分から話をかける事ができない。ぽつんとクラスにいるのは結構きつい、私は隣のクラスの茜に会いに行つた。

3組のクラスを覗くと茜は既にグループの輪に入っていた。周りの女の子達と楽しそうに笑つてゐる。

私は余計に淋しくなつた。しかしクラスが別れればこうなる事は分かつていた。

茜には人から好かれる雰囲気がある、のほほんとしながら、気がつくと周りに人が集まる。

邪魔しちゃつ悪いと思つた私はそのまま離れようとした、が茜は私

に気がついた。

「あつ未来ちゃん！ちょっとまって！」  
そう言って私を追いかけてきてくれた。

「未来ちゃん来てるなら声かけてよ～」

「いや・・・茜楽しそうだつたし、特に用があつた訳でもないから」  
茜は私がクラスに馴染んでいない事を察した。

「ねえ私さあ～今日の放課後、バスケ部の見学にいくつもりなんだ  
けど・・・一緒に行かない？」

と誘つてくれた。私に気を使つてくれているのだろう。

「あ～でも私はバスケには興味ないし・・・」

申し訳ないが遠回しに断ろうと思つた。なにせ私は体育の時間でさえ、自分にボールがくると3秒以内に誰かにすぐバスをしてしまう程自信がない。わざわざ部活に入つてまでやるなど問題外、論外、ありえない！

とは思つてゐるがせつかく私に気を遣つてているとゆうのにあまりハツキリと断るのは悪い気がしたので、それとなく言葉を濁した。

「運動部だと、ほら上下関係がきつそうだし、ちょっとねえー」  
まあ確かに部活を入れば自然と周りに打ち解けるだろうし、クラス内でも仲良くなれる子ができるだろう。だがやはり運動部は無理だ、この体では元々の自分より身長は低い、力も弱い、持久力もないのだから。

「上下関係？それなら全然問題ないよ！大丈夫！」

だつてここ正しくは部活じゃなくて同好会なんだよ！

芦岡女子バスケ同好会！～

え～！私の友達の何人かは芦岡女子に入つていたけどバスケ部あつたよ！

実際に入つていた子もいたし。

と声に出さずに突つ込みをいれた。

驚く私を見て茜は話を続ける。

「私もさ普通にあると思つてたよ！だつてバスケ部つてメジャーだしね。

でも昨日の放課後に先生に聞いたの、バスケ部は今日練習しますか？  
つて、そしたらさ、今は部じゃなくて同好会になっちゃつたつてゆうから。」

「え～バスケ部のない学校なんてあるんだ・・・」

私は呟いた。「ねー！私もびっくり！なんか先生が言つてはい何年間かで、アイスホッケー部、サッカー部、バトミントン部を新しく作つたんだつて。

そしたらいつの間にかバスケ部に入る生徒が減っちゃつて、もう部とは言えなくなつちゃつたんだつて！」

「・・・そつかあ。残念だつたよね？」

私は茜に問い合わせる。

「え・・・何が！？」

「何がつて、茜張り切つてたじやん！

高校では試合に勝ちたいつて。」

私の言葉に茜は平然として言う。

「ああね～、でもさ、未来ちゃんがゆうように確かに先輩とかいない方が気兼ねなくできるし、勝つも何も、まず自分が出でないとつまらなくつて！～そう考えればむしろ好都合かなと。」

まったく茜はポジティブに物事を考えられてで羨ましい。  
私だったら一気にテンションが下がつてしまつだろ。

「つて訳だから初心者の未来ちゃんでもオッケー オッケー！  
じゃ放課後にね」

そう言い残して茜はクラスに戻つていった。  
結局私は今回も断りきれなかつた。

そろそろチャイムが鳴るからクラスに戻ろう、そんな時私の目に昨日見た長身で色黒、つり目の私の苦手なタイプのあの子が見えた。絡まれでもしたら大変だ、私はそそくさと足早に歩いた。すると彼女は1組のクラスの前で足を止め、誰かに話しをかけ始めた。

あつ！風間さんだ！昨日新入生代表の挨拶をした風間さん。  
これは・・・絡まれてるのかつ！？  
お前調子こいてんじゃねーよ！！と。

あの顔で頭も良ければ嫉妬されても無理はない。  
どうしよう・・・止めるべき？

ああでもなんか威圧感あるよ・・・  
えーい私は彼女より3つ年上だ！  
年下にびびつてどーする私！  
いけつ！ケンカ売つてやれ！！

私は彼女達に近づく。

すると二人の会話が聞こえてきた。

「みもり、今日遅刻したでしょーーー！？」

「昨日DVD全巻みちつて寝たの朝方で～」

・・・なんだ、二人は友達か～。  
タイプ全然違うのに。

ともかく高校生活しゅつぱなから争い事にならず良かつた。

私は昔から争いは好まない。下手に目立つて目を付けられたくないし、クラスの中心人物になりたいなど一度も思つた事はない。ただ無難、普通でいい。

私は今までの人生の中で身に染みている、女の世界は汚い。必ず派閥は生まれ、何人か集まれば悪口が始まると、ついさっきまで仲良く話をしていた子のだ。

仲良しへグループといつたつて自分が休んだ日には何を言われているかわかつたもんじやない。

つまり大勢でつるんでいたつていい事はないつてもう十分に知っている。

大体トイレにだつてあんな大人数で行つてビリするとかううのだ・・・。

とにかくクラスでは波風立てない程度に周りと上手くやり、仲良しの女の子は2、3人いればよし。

それが今までの私の考え方。

だが一限目で係決めをしている最中思ったのだ、そうして今までの自分を貫いては何も変わらない、二年前と何も変わらない高校生活を送るのではないかと。

新たな自分になりたいとつい先日まで思つていたのが、結局は人間そう簡単には変わらない、変われないのかもしね。

「学級代表、誰かやらないか〜?」

担任の橋本先生の声が聞こえる。

あんな面倒な係、当然誰だつて避けたい。全係の中で一番決めるまでに時間がかかる。

まあ稀に率先して手を挙げる人もいるけど少ないところのクラスにはいないうだ。「誰もいないかー？くじ引きかー！？」  
どうやらお馴染みのくじになりそうだ。

「あたしやつてもいいですよ？」

窓際の方から声がした。

声の主は風間さんの友達にして私の苦手 なタイプの少女、えつと・・みもりつて呼ばれてたつけ？

「おつと森川か・・・やつてくれるのかあ・・・？」

心なしか先生の声に元気がない。

おそらくはこの外見、先生からしたら仮にもクラスの代表にするには不安なのだろう。

「じゃあ森川がやつてくれるなら、あと一人だな！学級代表は一人だからな！」

きつと今先生、心中でもう一人の子は真面目そうな子にやつて欲しいと思つてているだろうなあ。

そう思うと少し可笑しかった。

と同時に自分の心中にも声なき声がかすめた。

“やつてみたら私？今まで一度もなつた事ないし、今までの自分とは違う事をしたいんじょ？”

いやいや私はそんなタイプじゃないし！

直ぐさまその声を焼き消す。

それに皆の前で手を挙げるだけでも恥ずかしい・・・。

私は首から下げる羊のネックレスを触った。

妹の優香がこんな人の体になつてまでウジウジする私をみたら呆れるだろうか・・・？

ああもう…今日の心の声ついで…!  
やればいんじょやればっ…!

「あの〜私やります…」

私は小さく手を挙げか細い声を出した。

「おー音羽！よかつた、やつてくれるか！？」

決まって良かつた。

くじは面倒だからな」

クラスのみんなも私が引き受けてくれたホッとした様子だ。

放課後、私はとつとと家に帰ろうとした。慣れない生活で過ごす時間は疲れたし、今日は早起きで髪をセットしていたので余り寝ていない。

しかし廊下で茜が私を待っていた。

「あれ茜…、待つてたんだ！？」

「そうだよ〜、一緒に見学行く約束だつたでしょ？」

できればこのまま帰りたい。茜は凄く感じのいい子だし、気さくで優しい、ただ唯一つ欠点があるとしたら自分の好きな事を人に強要させるけがある事かもしれない。

まるで全く興味の湧かない映画に無理矢理連れていかれるかのようだ。

正直気がすすまない。でもここ数週間、茜は私にいつも優しくしてくれた。数十分くらいは付き合つてあげるべきだ。

「でさ、何処で活動してるの？  
体育館？」

私は尋ねた。

「いや体育館じゃなくて外だつてさ。

中はバレー部がほぼ独占してるから

ここ丘岡女子のバレー部は県内屈指の強豪だし、加えてこここの体育館は狭いから同好会では使えないのも仕方ない。

そこはグラウンドの隅っこ、テニスコートの隣にある狭いスペース、小学生用並に低いリングが一つ並ぶ。しかも二つの間の幅は僅か10？程しかない。

これは余りにひど過ぎる！

まともな練習など出来るわけない。

私は茜の様子をちらつと伺つた。

彼女もさすがにここまで酷い場所だとは思つていなかつただろう。

「誰もいないね・・・・？」

さすがに茜も不安そうに呟いた。

私達は顔を見合わせ立ち往生してしまつた。

「なになに入部きぼう〜！〜？」

テニスコートの方から声が聞こえる。

私達がそちらに目をやると女の人がこっちに向かつてくる。

ポニーテールの恰幅の良い女性だ。

背は高く横幅もあり私はつい先生かと思つた。

しかし女性が近づくにつれ彼女が若い事に気がついた。危なかつた、

危うく先生と呼んでしまつところだつた。

「二人はバスケ同好会に興味あるの〜？」

女性が息切れをしながら尋ねる。

「はい・・・でも部員が見当たらなくて・・・」

茜が困つたように答える。

すると女性は

「マジで〜？うけるんだけど、つてかさ、あたし一応入つてるか

ら～！」

と言いながら手をパンパン叩いて笑っている。

「えつ！？でも今テニスしてませんでしたか！？」

私は驚いてつい口を出した。

「ああね～。まあうちら基本テキトーで～、今日とかテニス部練習休みとかだと～、コート借りて遊んでるつてわけ～！超やる気なくね？みたいな！」

ずいぶんとテンションの高いその女性に私達は呆気にとられてしまった。

「ちょっと二人共引かないで～！」

あたしこれでも三年で部長の渋沢玲奈つてゆうのね～。

つか部じゃなくて同好会だから会長つてゆうのかな？

ふふつ、むしろ地位上がつてね？みたいな。うけるわ～

・・・一人で盛り上がつている様子だ・・・。

「あつ私は東野茜つていいますつ、渋沢先輩つ、練習はいつしているんですか？」

「・・・練習ね～、う～んうちら顧問とかいないし～三年が3人だけだし～まあ受験生だし～大会とか出る予定ないし～まあたまに、気が向いたらたまに、週一くらいボール触るかな～？つてそんなやつてないか～」

適當過ぎるその言葉に私達は愕然とした。

言葉を失う私達をよそに渋沢先輩は続ける。

「とりあえず部じゃないから入部届けとか大丈夫だから～！こじら辺適当に使つてオッケーだし。

うちら～くたまに姿見せるかもしれないけど、まあ基本現れないから～。

友達誘つて頑張つて！」

先輩は言いたい事だけしゃべり、再び巨体を揺らしテニスコートへと戻つて行つてしまつた。

残された私達は再度顔を見合せた。

茜が口を開く。

「どうとにかく入部したって事かな?」 「ううん・・・、あつ・

・・いや、私は入ってないけど。」

「こよこのよ独り言のようにしゃべる私。

とは言えこの状況では入部も何もあつたもんじやないが。

こんなへんぴな隅っこぽつんととり残された私達、まつたくもつて先が思いやられる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1011t/>

---

ワンモアチャンス

2011年10月9日02時50分発行